

公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団
第8回環境シンポジウム 基調講演

ムラのミライができたこと できないでいること

特定非営利活動法人ムラのミライ
代表理事
中田 豊一

私、中田豊一は、

- 1956年、愛媛県最南端の漁村に生まれる
- 愛南町立久良小学校に入学

生徒数：1962年 = 420人

2020年 ⇒ 16人

- 父は久良尋常小学校（5年生まで）を出、漁師、船大工を経て魚の行商を25歳から82歳まで営む
昨年12月、91歳で死去。
- 母は父と同じ村の出身。鮮魚商を父とともに営む。現在85歳。父の死後、認知症が進行し、介護施設（グループホーム）に入居
- 弟は東京で医者。義理の父は透析中でやはり認知症
- 妻の母も認知症のため、この9月、介護施設に入居
- 現在は神戸市須磨の海が見えるマンションに、妻と息子の三人暮らし



国際協力を職業に

- 18歳で東京に。大学で学ぶ
- 留学中のフランスでカンボジア難民と出会い国際問題に関心
- 帰国後、在日ベトナム難民の支援などのボランティア活動へ
- そのままズルズルと国際協力の世界に入り、いつの間にか職業に
- これまでで、最も大きな経験は、バングラデシュでのもの
- 国際協力NGO「シャプラニール＝市民による海外協力の会」の現地駐在員として1986年～89年、バングラデシュで活動
- その後もNGOに軸足を置いて活動
- 現在、特定非営利活動法人「ムラのミライ」代表理事

ムラのミライの活動

団体名：特定非営利活動法人ムラのミライ

法人設立：1993年4月1日

本部：〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ堀町2-22

早川総合ビル3F

認定 NPO 法人

ムラのミライ



セネガル：
ファーマーズスクール



鳥取県倉吉市：
コミュニティファシリテーター養成研修



兵庫県西宮市：
地域で助け合う子育ての輪



インド：
循環する村づくり



インド：
おばちゃん信金



ネパール：
環境教育と環境保全活動

メタファシリテーション

という対話手法を用いて、当事者自身が納得のいく答えを一緒に導き出していく活動に取り組むNPOです。

メタファシリテーションは元々途上国で編み出された住民主体の活動を促す手法
→日本の地域づくりでも活躍！

バングラデシュでの苦い経験（1）

	国土面積	人口
バングラデシュ	147,000 km ² （世界91位）	1億5900万人（世界9位）
日本	378,000 km ² （世界62位）	1億2660万人（世界11位）

- 当時のバングラデシュは、世界の最貧国として知られ、世界中から援助機関が殺到。
- 特に、農村貧困層＝土地なし農民の生活が困窮。
- シャプラニールも、土地なし農民による相互扶助グループの組織を促し、彼らの自助努力を側面支援して活動。
- 収入向上、保健衛生、教育などなど多岐にわたる生活支援を実施
- その企画・立案、監督などのために頻繁に農村を訪ねて農民とやり取りするのが最大の役割





バングラデシュでの苦しい経験（続き）

- 不便な生活・異なった文化や風習に戸惑うが、徐々に慣れる。
- 言葉も上達するが、それに伴い本当の問題が浮上。
- 何を話題に村人と話を進めるべきかわからない。
- そこで：
 - 生活はどうか？⇒相変わらずたいへんです
 - どうすればいいですか？⇒シャプラーニールの支援で自助努力してます
 - 最近導入した牛の肥育、うまく行っていますか？子牛の世話はしっかりやっていますか？⇒もちろんです！
- しかし、3か月後には…
 - 半分死んだから、買いなおすための支援が欲しい…
- 釈然としないまま、結局、追加支援するしかない

バングラデシュでの苦しい経験（続き）

- 特定のパターンに気づく：相手はこちらが期待する返事を知っていて、それを答えるだけ。そして最後には：
「援助はありがたい。でも、さらにはこれをやってもらえると生活はもっと良くなる」
- 今やっているものが本当に役に立っているかあいまいなまま、次の支援を考えなくてはならなくなる。
- こうしたやり取りにウンザリ。でも、どうしていいのかさっぱりわからない。2年目になっても、3年目に入っても状況は改善しない
- 本当に役にたっているのか？必要とされているのか？そもそも人々は本当に貧困に苦しんでいるのか？考えれば考えるほどわからなくなり、心身ともに消耗。何が問題なのかもはっきりしない

村人の姿は、曇りガラスの向こうにあった

- すべてがぼやけていた。何かがおかしいという感覚が強まるだけで、何が問題なのか、どうすれば改善できるのか、まったくわからない。
- 住民主体をうたっているものの、どうも違うような気がする。周りを見回しても、そのようなプロジェクトばかり。
- 援助業界の仲間に打ち明けたり、相談したりしたが、誰も納得する答えをくれない
- 1989年8月、疲れ果てた私は、任期を短縮して帰国。
- 1994年12月、この業界を離れ、心機一転やり直すつもりで兵庫県尼崎市へ移住。⇒翌月、阪神大震災！！
- ボランティアグループの緊急援助、復興支援活動に巻き込まれ、また援助の世界に戻る
- 5月、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンという国際NGOに就職。ネパールやフィリピンの現場を訪ねると、また同じことが起こる

曇りガラスが晴れる時が来た

- 2000年2月、外務省の評価団の一員として、飛騨高山のNGO（現ムラのミライ）のリーダー、和田信明と共にラオスに。そこで目にした和田のインタビュー術に目からうろこが落ちる！
- 和田は、暮らしぶりや問題については一切尋ねず、そのへんのものや作物などを指して；
- 「これは何ですか？」 「何でできているのですか？」 「誰が作ったのですか？」 「いつ、手に入れたのですか？」などと淡々と聞いていくだけ
- 相手も淡々と答えていくうちに、やり取りのテンポがよくなり、会話がスムーズになってくる。
- そして、いつの間にか話は本題に近づき、「決定的なひとこと」が突如導かれる

ラオスの焼き畑光景 森林破壊の元凶と見なされる



焼き畑やめたって本当？

- 私：（山を見ながら）焼き畑はもうやってないんですよね？
- 担当役人：もちろんです。禁止されていますから
- 和田が代わる：「（道端の立て看板を指して）これは何ですか？」
⇒「集落の地図です」「ここは何ですか？」⇒「水田です」
- 水田はどのくらいありますか？単収は平均どのくらいですか？世帯当たりの米の消費はどのくらいですか？と聞いていくうちに
「それじゃあ、生産量が足りないことになりますね？」
⇒「（自慢げに）ご心配なく、山の向こう（見えないところ）で焼き畑やっていますから十分足りています。（地図を指して）今年はこのところのあたりが中心です。でも最近、この辺では土地を巡る争いが起こって困っているんですよ」など本当のことが次々と出てきた

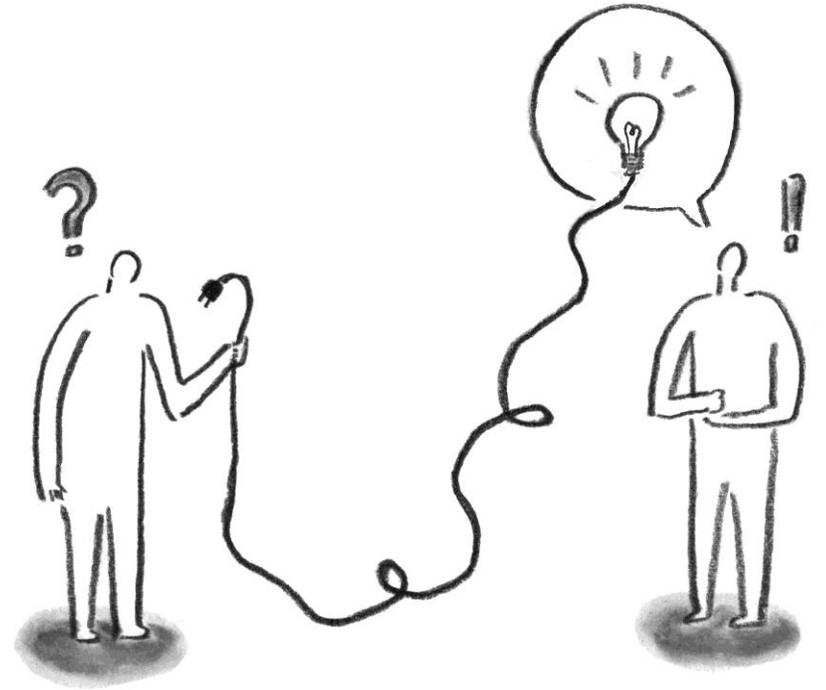


和田インタビュー術の「秘密」の解明へ

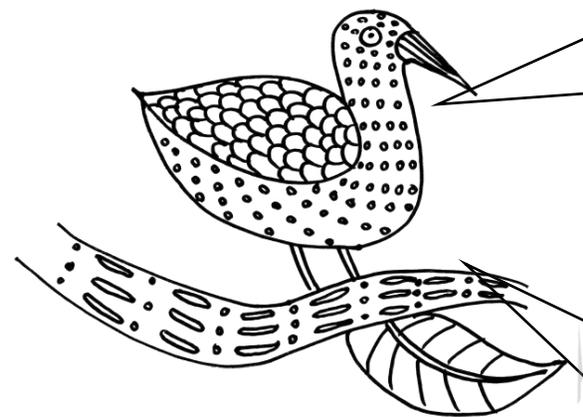
- これができなかったから、私のメガネは曇っていた！
- 足りなかったのは、コミュニケーション能力だった！
- 「教えてください」「えっ、何のこと。みんなやってるんじゃないの？」「自分でもわからないから、教えられないよ…」
- どうするか？⇒盗むしかない。追っかけが始まる
- だんだんわかってきたのは；
- 「何ですか？」「いつ買ったの？」「いくらだった？」「誰から買ったの？」と、
- ○○を中心に聞いて行っていること。しかも簡単な質問
- つまり **簡単な（シンプルな）事実質問** を繋いで行くだけ

しかし、「秘密」は残った

- 3つか5つは事実質問ができる。しかし続かない。練習が必要。しかし、どうやって練習すればいいのかわからない。
- 和田は教えてくれない。また壁にぶつかる…



2年後、曇りガラスが晴れる日がついに来た！
バングラデシュの村の研修所でのこと



1. 朝ごはんは何が好きですか？

⇒ ごはん

2. 朝ごはんはいつも何を食べますか

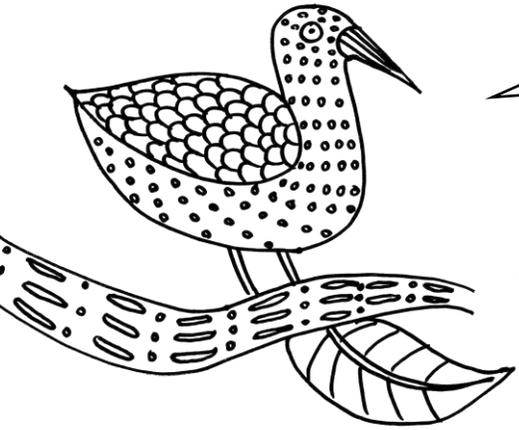
⇒ ごはん

3. 今朝は何を食べましたか？

⇒ パンでした

この次には何と聞いたでしょうか？





1. 朝ごはんは何が好きですか？

2. 朝ごはんはいつも何を食べますか？

3. 今朝は何を食べましたか？

感情

考え

事実



練習方法がわかる ⇒ 2番の質問をやめる

- いつもは？ 毎日は？ ほとんどの人は？ 農民の皆さんは？ などなど、一般化された質問、一般的な質問、つまり2番のパターンの質問は、一見すると事実を聞いているように思えるが、実は、意見、考えを聞くものだった
- 振り返ってみると、私は、村人相手に、そういう質問ばかりしていた。しかも、それで事実を聞いていると勘違いしていた。この「勘違い」こそが、私のガラスの曇りの正体だった
- これがわかった私は、自分の質問が、3つのうちのどれに当たるかを常に意識しながら、もし2番だとわかったら、それを保留して3番に変えるよう心がけた。練習方法がわかったのだ！

『開発援助劇場』を超えて

- 「絆が大事ですよね？」 「助け合う関係が必要ですよね？」 と呼びかければ、誰でも「そうだ」と答える
- インドネシアでの例
- **タバコを吸うのは体に悪いと思う方、右手を挙げて下さい→全員**
- **では挙げた右手はそのままで、タバコを吸う習慣のある方、左手を上げて下さい→7割がバンザイ**
- こんな結論を得るために住民ミーティングやワークショップをやるのか？ 本人も怪しいと感じている 「意見」 を聞いて何になるのか？
- 途上国では、この手の呼びかけから始まった住民グループが山ほどでき、援助が終わったら尻すぼみになって消えて行った「住民主体の組織」の残骸だらけ。金の切れ目が縁の切れ目、というわけ
- 地域の人々は親切でやさしく、こちらに合わせてくれる。この「開発援助劇場」の芝居が終われば、それぞれ元の自分に戻っていただく。何も変わらない
- では、これを防ぐためには、どう働きかければいいのか？

問題を知るためには問題を聞かない

- 「何か問題がありますか？」と尋ねる。問題が知りたいので。
- ⇒相手は、「何か欲しいものがありますか？」と頭の中で翻訳
- 特に信頼関係がなければ、本当の問題など打ち明けるはずがない
- 結局、欲しい物、足りない物を数え上げることになる
- 信頼関係とは何か？ ⇒ 助ける側、助けられる側の立場を超えて、同じ人間として、互いを尊重し合える関係。つまり対等感が底になければならない
- 結局のところ、一番大切なのは、相手の自尊感情を大切にする姿勢。しかし、気持ちは伝わらなければならないも同じ。
- だから、私たちは、「なぜ？」と聞かない。

「なぜ？」と聞かないのは「なぜ」なのか？ 「なぜ」私たちは安易にそう聞いてしまうのか？

- 2番目の質問、つまり「意見や考え＝思い込み」を尋ねる最悪の質問は、「なぜ？ どうして？ (Why)」。これを完全に封印！
- どうして遅れたの？ ⇒道が混んできた
- どうしてやらなかったの？ ⇒急用ができた
- 私たちは、あまり好ましくない自分の行為や状態について「なぜ？」と聞かれると、責められている気がして、つい言い訳してしまう。それを聞いて何になる？本当の理由はわからない上に、どちらも不快になるだけ。
- 「夜は陸から、昼間は海から風が吹くのは、なぜ？」とは全く別物。
- この違いがわからず、課題分析できると勘違いして「なぜ○○しなかったの？」と聞いてしまう。学校でも家庭でも、職場でも！

相手と対等感を築き、自らが課題を分析することを促す、この手法を「メタファシリテーション」と名付けた。

和田信明とともにその手法を発展させ、体系化し、普及してきた⇒今やライフワークに

メタファシリテーションのメタは、メタ認知のメタ。
他者を見ている自分をよく見ながらやり取りする、ということ

メタファシリテーション 3つのルール



1. 事実のみ質問する
2. 提案、アドバイスはせず相手が気がつくまで待つ
3. 自己肯定感に配慮する（相手が答えやすい質問をする）



もう少しありますが、
「これだけは！」
という3つです。

途上国では絶大な効力を発揮

- インド農村でのプロジェクト
- インドのスラムの女性銀行
- イランの水資源管理
- インドネシア漁村のゴミ問題
- 「途上国の人々との話し方」は、英語、ペルシャ語、インドネシア語、フランス語、アラビア語に翻訳される。

青年海外協力隊員のバイブルとさえ呼ばれる。







和田の名人芸：命はどこから来るのか？

• インドネシアの辺鄙な漁村で

村人 (V)：海岸がゴミだらけです。皆がポイ捨てするから。どうしたらいいですか？

和田 (W)：皆さんはイスラム教徒ですよね。

V：はい、村人は皆ムスリムです。

W:皆さんの命はどこから来ますか？

V:もちろん、アッラーからです。

W:では、命が終わったらどこへ行きますか？

V:この世で終わった命はアッラーにお返しします。

和田の名人芸：命はどこから来るのか？（続）

・波打ち際の合成洗剤が入っていたビニール袋を指して

W:これは何ですか？

V:洗剤の袋です。

W:どこから来たものですか？

V:店で買ったものですが、もともとは工場からでしょうね。

W:工場から来たものをどこに返していますか？

V:海ですね。このあと、村人は沈黙・・・

W:アッラーからいただいたものはアッラーにお返しする。土から来たのものは土に返す。海からのものは海にもどす、ということですね。

この後、村人はゴミの分別の仕組みを導入し、村は、ゴミの山から解放された。⇒本当の話です



では、日本国内では？

- 本格的な運用は5年ほど前に始まったばかり
- とはいえ、個人レベルで行動変化に向けた気づきを促したり、課題分析を手助けしたりは、すでに多くの成果を上げている。

◆**岐阜県郡上市での獣害対策における住民と援助団体とのコミュニケーションに**

◆**沖縄名護市での地域振興職員の研修に、青森での医療福祉ワーカーの研修に**

◆**最近一番成果を上げているのは、本部事務所を置いている西宮市の子育て支援グループへの協力とその延長の「思春期のお子さんを持つ親のためのコミュニケーション講座」に**

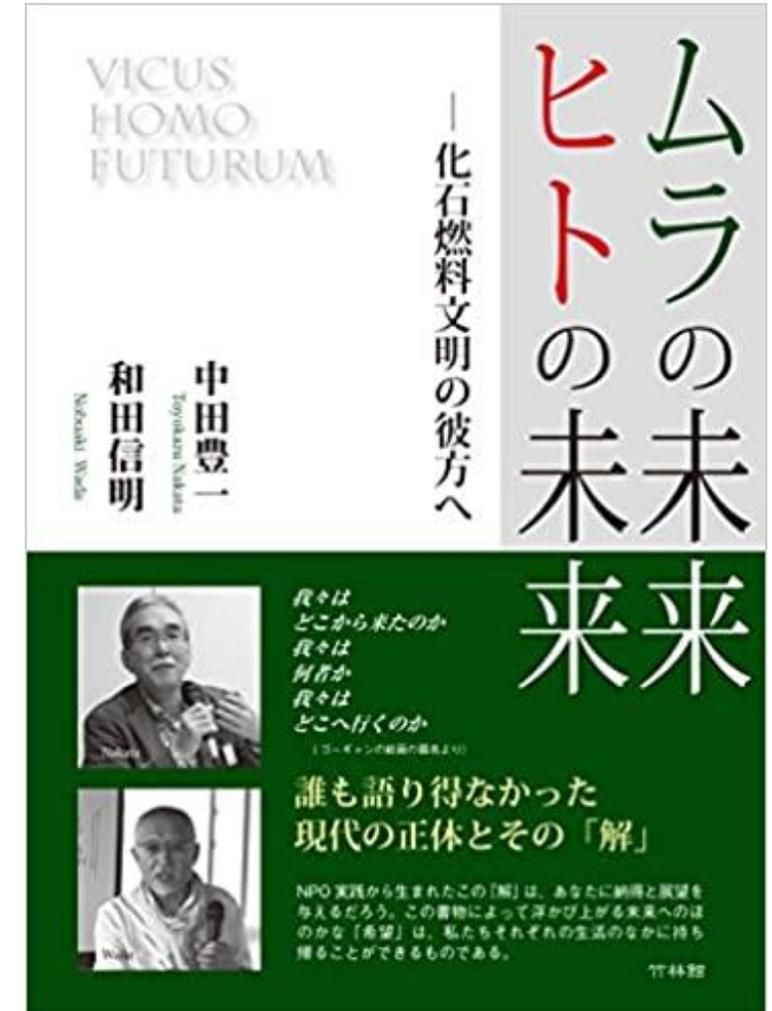
ひとりで子育てを担って苦しんでいるお母さんたちの相互扶助グループのコミュニケーションツールとして、当事者間や家族間、特に子どもや夫との関係の改善のために、大きな効力を発揮

できたこと

- これまで述べてきたように、国際協力の世界ではもちろんのこと、日本国内でも、小さな団体の小さな現場での試みとしては、予想以上の成果を挙げていると思う。
- 和田と私だけが使えたメタファシリテーション手法を自在に駆使し、他者に伝えることができる若手の人材も、どんどん育ってきている。
- 念願だった日本国内での行政による対人支援の活動現場への導入にも、道が開けつつある。厚生労働省の支援による「地域住民の健康増進に携わる人のためのコミュニケーション研修」事業を現在展開中。

できないでいることは？

- 丁寧な事実質問を重ねるうちに浮上してきた近代文明の正体を、化石燃料文明と名付けた。
- 化石燃料の圧倒的な力による社会や生活のあり方、環境の激変に生身の私たちは付いて行けない。自己紹介で述べたように…。ミクロレベルでの努力ではどうにもならず、無力感に苛まれることも。
- 特に、生物としての人間の存立基盤である「水、土、植物」が急激に衰退。それを指をくわえて見ているだけ。途上国の人々はそこへの依存がより大きいのに。



できないでいることは？(続)

- こうしたマクロな話し、一般論、理想論は語るのには易しいが、行動するためには、「大きな川の流れに抗して小舟を漕ぐ」感覚との自分なりの付き合い方、処し方を持っている必要があるが容易でない。
- 等身大の生活の中で見えてくる「事実」を基に自分の頭で考えるという姿勢と手法を広めているが、「意見の偏重」は根強い。
- その傾向を強く持つ社会・人文科学に受け入れてもらえないため、学校教育や政策形成に対する影響力を持てないできた。
- とはいえ、一昨年あたりから、厚生労働省や農水省の若手官僚たち、東北の医療従事者のグループ、幼児教育に取り組む若手研究者たちなど、私たちの手法と考え方に共感して、その普及と発展に協力してくれる若い力を国内で得たり、企業からも社内コミュニケーションのツールとして関心を持たれ始めたりと、展望は急激に開けつつある。若い力に期待！